

ジローラモ・サヴォナローラの説教と聴衆の受け取り方

— 1496年4月1日の説教の場合 —

小 西 礼 子

1. はじめに

ドメニコ会修道士ジローラモ・サヴォナローラは、1484年に「教会は罰せられ、改革される、それもすぐに」という「神の啓示」を受けて以来、フィレンツェを中心に「神罰の到来」とそれに備えた「悔い改め」を説く「預言的説教」を精力的に展開していた。そして、同市で、1494年後半から相次いで生じたフランス軍侵攻、メディチ家追放、新共和国政府樹立という、いわば「預言」が実現したかに思わせる諸事件は、サヴォナローラに対するフィレンツェ市民多数派の支持を決定的にした⁽¹⁾。フィレンツェにおけるサヴォナローラの思想的・政治的影響力は、彼の修道士としての「説教」によって増大し、また、維持されたということができよう。

サヴォナローラが人々に訴えかけた説教内容は、今日、彼の著作集として刊行されている『サヴォナローラ国定版全集』 *Edizione nazionale delle opere di Girolamo Savonarola* 所収の諸説教によって窺い知ることができる。これまでの研究により、1495年以降の説教記録のほとんどは、サヴォナローラの支持者であった公証人ロレンツォ・ヴィオリ Lorenzo Violi が、説教時にボランティアとして速記し、清書した原稿を、サヴォナローラ自身が校閲を行い、その後活字化、印刷されたことが明らかとなっている⁽²⁾。

サヴォナローラの校閲を経たこれらの説教記録は、「サヴォナローラが説教で主張したかったこと」を正確に表現しているかもしれない。しかし、当時、サヴォナローラの説教を聴き、感動した人々が、説教師の意図を説教師の期待するような形で理解していたかどうかは別問題である。「聴いていた」人々は、サヴォナローラのメッセージをどのように受け取ったのであろうか。聴衆が、説教師の意図とは異なる受け取り方をした可能性は小さくない。

この問題を解く手がかりとなるのが、説教の「聴き手」である（そして、多くの場合、説教師との個人的交際を持たない）一聴衆が、説教を聴きながら、その内容を自分の理解と関心にあわせて書き留めた「聞き書き」、いわゆる「筆録説教」とよばれている史料である⁽³⁾。筆録説教は、大黒俊二氏が述べるように、説教の完全記録ではなく、筆録者の判断すなわち「人格というレンズによって大なり小なり屈折された像」であり、この屈折（誤解や曲解、忘却など）から筆録者の理解・関心等を窺うことができる史料である⁽⁴⁾。幸運なことに、中世末期のフィレンツェで行われた説教に関しては、有名無名、さまざまな説教師の説教を聴いた俗人の書き残した筆録説教がいくつか残っており、それ

それに個性ゆたかである。しかし、俗人が筆録したこれらの説教には、実際に行われた説教の全体像の記録が残されていないことから、筆録部分と説教全体との関係を再構成することは至難である。すなわち、筆録説教だけでは記録が屈折していることはわかっても、屈折の度合いが測れないのである。

本稿では、1496年4月1日に、フィレンツェの大聖堂サンタ・マリア・デル・フィオーレ教会（ドゥオーモ）で、サヴォナローラが行った説教を取り上げ、サヴォナローラの校閲を経た説教記録と上記のような俗人による筆録とを比較することによって、説教師の意図と聴衆の受け取り方との間の「ずれ」について考察したい。史料は、上述の『サヴォナローラ国定版全集』に含まれる説教集『アモス書とゼカリヤ書についての説教』の説教44⁽⁵⁾、および、本説教の一聴衆による記録である筆録説教として、現在はリッカルディアーナ図書館（フィレンツェ）に所蔵されている無名俗人による記録⁽⁶⁾を用いる。これは、1968年にZ. ザファラーナが校訂・活字化した版⁽⁷⁾である。

2. 1496年4月1日説教の背景と史料の成立事情

冒頭で述べたように、1494年のフィレンツェの諸事件によって、サヴォナローラがそれまでの説教の中で繰り返していた「神罰の到来」と「預言」はいわば現実となり、1495年以降、彼の「預言者」としての影響力はフィレンツェ内外で増大していった。しかし、それと同時に、サヴォナローラの言動に反対する人々も世俗、教会の両方において増加し、サヴォナローラは、自らに対する誹謗中傷を無視できないと感じ始めた。そのため、サヴォナローラは1495年8月に、「敵対者の中傷を払拭するために」、それまで繰り返して行ってきた預言的説教の重要点を体系化した『天啓大綱』を出版した⁽⁸⁾。

教皇アレクサンデル6世も、フランス王シャルル8世と友好的で、説教において「預言」に基づいた教会改革を唱え続けるサヴォナローラに反対する立場にあった。彼は、1495年9月8日と10月16日の二回にわたって、サヴォナローラの説教を禁止する小勅書を発行した。したがって、この年、サヴォナローラによる待降節の連続説教は行われず、その間サヴォナローラは、巷に広まった、この説教禁止に関する噂や中傷に対する書簡形式の弁明書『一人の友人への書簡』 *Epistola a uno amico* を執筆していた⁽⁹⁾。

一方、フィレンツェ政府は、このような教皇アレクサンデル6世の処置に対し、11月16日に教皇庁に手紙を書いてサヴォナローラの待降節の説教の許可を求めた⁽¹⁰⁾。しかし、12月11日には、ルカ・ランドイッチが日記に記しているように「教皇はジローラモ修道士に説教をしてはいけないと命じるために[フィレンツェに]人を派遣した。⁽¹¹⁾」([]内は筆者の補足。以下同様。)翌年の1月28日には、フィレンツェ政府は再び教皇庁に、サヴォナローラが四旬節に説教を行うことができるように嘆願の書簡を送った。また、プラートでは、サヴォナローラが当地の聖ドメニコ修道院長アントニオ・ディ・オランダ Antonio di Olanda に宛てた手紙で命じたように、説教再開のための祈りが捧げられていた。

その甲斐があったのか、教皇アレクサンデル6世はサヴォナローラが再び説教壇に上がることを承認し、この知らせは2月14日と15日にフィレンツェに届けられた。翌16日のカーニヴァルには、サヴォナローラ自身が四旬節の説教の許可が下りたことを市民たちの前で公言した。翌々日の2月17日の灰の金曜日から、大聖堂サンタ・マリア・デル・フィオーレ教会において、フィレンツェ市民が待ち望んでいたサヴォナローラによる1496年の四旬節説教が始まった¹²⁾。本稿で取り上げる4月1日の説教は、その一環である。

(1) 『サヴォナローラ国定版全集』所収の『アモス書とザカリヤ書についての説教』

この刊行史料には、1496年の四旬節すなわち2月17日（灰の金曜日）から4月10日（復活祭の8日目）にかけてサヴォナローラが行った48回の連続説教が収められている¹³⁾。これらの説教は、サヴォナローラの「生の声」viva voce から、主に、先に述べた公証人ロレンツォ・ヴィオリの速記によって記録された。速記者ヴィオリは、1464年2月14日にフィレンツェで羊毛職人と染物工を営む裕福な家庭に生まれ、1495年から1548年まで公証人として活動し、その間にフィレンツェ共和国の書記官も務めた俗人である。G. C. ガルファニーニによると、ヴィオリにとってサヴォナローラの説教をまとめる作業は、それらを出版・販売して利益を得ることが目的ではなく、彼の内面にとって「本質的」なことであり、個人的な「満足感」のために行われていたらしい¹⁴⁾。実際、サヴォナローラの死後の16世紀初頭にも、ヴィオリは他の説教師のいくつかの説教を記録している¹⁵⁾。

ヴィオリの速記から清書された四旬節説教の原稿は、印刷屋に届けられる前に、サヴォナローラによって校閲された。彼の承認を得た上で、バルトロメオ書店、ロレンツォ・マルジアーニ、フランチェスコ・ブオナッコルシの3箇所活字が組まれて、ヴィオリの費用で印刷され、1497年2月8日に出版された。出版後は、すぐに売り切れとなった。1505年の再版からは、初版では単に『フェッラーラのジローラモ修道士の説教』としか書かれていなかったタイトルに、説教の主題となった二つの預言書『アモス書』と『ザカリヤ書』の名前が付け加えられ、1544年までの間に主にベネチアで（1513年の1回だけはフェッラーラで）9回再版された¹⁶⁾。また、ヴィオリは、初版売り切れの後、多くの人々の要望に応じて説教集の概要を編集して印刷したが、それが実際に出版されたのはサヴォナローラの死後であった。

本稿で検証する4月1日の説教は、この『アモス書とザカリヤ書についての説教』の44番目の説教である。今回のテキストとして用いる『サヴォナローラ国定版全集』では、1ページ30行で47ページ¹⁷⁾ある。

(2) ザファラーナ校訂の無名俗人の筆録説教

本史料の原本は、現在フィレンツェのリッカルディアーナ図書館に所蔵されている ms. Riccardiano 1186c という整理番号が付された、無名の俗人による手書きの筆録説教である¹⁸⁾。この

史料の筆者や構成については大黒俊二氏がすでに「文字のかなたに—15世紀フィレンツェの俗人筆録説教」において詳論している¹⁹⁾ので、ここではそれを要約する形で紹介する。

この筆録説教は、1467年から1502年にかけてフィレンツェで行われた複数の説教師によるいくつかの説教を記録している。筆者の名前は不明だが、書かれた商人草書体から男性の商人か手工業者、またラテン語引用文を記してはいるが文法的な誤りが多いことから、世俗的な仕事のかたわら読書や執筆にも強い興味を示していた「もの書き商人」だと推測されている。筆録の冒頭には、本筆録説教の記録を始める前に、筆者によって作成された「目次」がおかれている。彼が、諸説教を記録することにより、個人的に作り上げようとした「信仰問題の体系」である。もっとも、後からいくつかの項目が加筆されていることから、筆録が自分の予定すなわち「目次」通りにいかなかったことが窺える。さらに、筆録内容が説教の構成をほぼ正確にとらえていると考えられることから、彼の記憶だけではなく、説教を聴きながら書き取ったメモを元に作成されていたと推測される。また、「目次」の項目と筆録内容から、この筆録者が罪と罰、善行と救済の関心に強い関心を抱いていたことがわかる。

彼が筆録した説教を行った説教師は、ドメニコ会修道士、フランチェスコ会修道士、アウグスティーノ会修道士など多岐にわたっており、筆録の最初には場所と日時と説教師の名前が書かれている。それは、筆録者が説教内容だけでなく、説教師にもかなりの関心を抱いていたことを示唆している²⁰⁾。そのような中で、筆録されているサヴォナローラの説教は、本稿で検証する1496年4月1日の説教だけである²¹⁾。1490年代のフィレンツェにおけるサヴォナローラの説教回数と影響力を考えると、少ないようにも思えるが、そのことについてザファラーナは、シモーネ・ベルティ Simone Berti 修道士の落ち着いた説教やマリアーノ Mariano 修道士やロベルト・カラッチョロ Roberto Caracciolo 修道士など、当時評判の高かった説教師の雄弁な説教がこの筆録者の好みであり、「一人の説教師[サヴォナローラ]の言葉によってフィレンツェが[支持と不支持に大きく]分裂していた重大な時期は、この筆録者にとって沈黙の時期であった」と述べている²²⁾。このことから、俗人による筆録説教は、筆録された説教の内容だけでなく、筆録するための説教および説教師の選択にも、筆録者の主観が反映されているといえるだろう。

この無名の俗人による筆録説教 ms. Riccardiano 1186c には、説教や書簡など全部で49の文書が収められているが、サヴォナローラの説教はその13番目であり、先に述べた「目次」の「キリストの肉体について」の項目の中に記されている。

3. 俗人によって筆録された内容

本章では、まず、ザファラーナ校訂の無名の俗人による筆録説教（以下、『無名俗人の筆録』と記す）の内容を確認し、次に、それを『サヴォナローラ国定版全集』所収の『アモス書とザカリア書について』

ての説教』の説教44（以下、『国定版全集』と記す）の内容と比較検討する。

『無名俗人の筆録』では、サヴォナローラの説教の筆録も、他の筆録と同様に、冒頭には説教師の名前、日時、場所、そしてラテン語で説教の主題(マタイによる福音書11章28節)が記されて、以下のように始まっている。

4月1日の聖金曜日にサンタ・リペラータ[教会]²³で、フェッラーラのジローラモ修士が説教を行った。福音書において、崇高な真実すなわち「苦勞する者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに來なさい。あなた方を休ませてあげよう」といっていることばについて。(イタリック体は原文ラテン語。以下同様。)²⁴

続いて、この説教において中心的なテーマとなる、創世記28章のヤコブの夢の中に現れた天国まで達する階段について、簡潔にまとめて書いている。

彼[サヴォナローラ]が、あの階段について、心に得た幻想や靈感を語る夜が彼にやって來たと言った。その階段は、旧約聖書において、ヤコブのもとに現れ、天から地上に達し、一番上からは神が來られて彼にこう言った。「ヤコブよ、上に來なさい。」そして、この階段には、上に上り、天すなわち永遠の生に行くために、7つの踏み段があるように彼には思えた。²⁵

この後、『無名俗人の筆録』は、ほとんどが7つの踏み段の解釈にあてられている。『国定版全集』によれば、サヴォナローラは説教を始めてすぐに(3ページ目)に、創世記28章のヤコブの出発について語り、その中で階段について紹介している。そして、「今朝はこの階段を通して、あなた方を樂園に導いていきたい。この階段の頂上には主がおられ、こう言う。「苦勞する者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに來なさい。あなた方を休ませてあげよう」と。その階段には7つの踏み段がある。」と続けている²⁶が、実際に7つの踏み段の説明が始まるのは、説教のおよそ3分の1のところ(14ページ目)からである²⁷。その後、7つの踏み段の説明は説教の残りの3分の2を占めているので、それは確かに説教の主要なテーマである。しかし、『無名俗人の筆録』には、『国定版全集』の説教の導入部に当たる部分が全く見られず、記録のほとんどがこの7つの踏み段の説明であることから、この説教に対する筆録者の関心が専ら踏み段の説明にのみ向けられていたことは明らかであろう。

サヴォナローラは、『国定版全集』の説教において、7つの踏み段について聖書の引用や比喩を用いて、それぞれ一段ずつ順番に解釈している。各踏み段に割り当てられた紙幅にはかなりの長短があり、一番長い三段目については9ページにも及ぶが、その他はすべて5ページ以下である。また、一段目から順に解釈しているので、当然七段目の解釈は説教の最後にならないとわからない構成になっている。一方、俗人筆者は、各踏み段の個別の詳しい解釈を書く前に、まず「一段目は、信仰だと言っ

た。二段目は、矛盾または真の不和。三段目は、一致もしくは確認。四段目は、機敏さ。五段目は、謙虚な結びつき。六段目は、敬虔さと従順さ。七段目は、忍耐。」と、まとめて7段全ての意味を記している²⁸。このことから、大黒氏が指摘しているように、筆録者が説教を聴きながらメモを取り、後にそれらを整理して筆録したことが理解できる。

そして、『無名俗人の筆録』では、一段目から順に7つの踏み段の意味が、以下のようにまとめられている。

まず、一段目の踏み段に必要なのは、信仰を持つことである。なぜなら、何も信仰がなければ、善いことを行えないからだ。すなわち、三位一体の神や楽園の栄光について考えることであり、この世で善いことを行う者はあの世で永遠の生を得て精神的な幸福を楽しむだろう。そしてこの信仰は、物事を希望することの本質であり、見えない確信である。すなわち聖バオロが言うように、見えない物事を希望することである。そしてこの信仰は、言われているように、救済には必要で、これなしには人は善い利益を得ることは全くなく、そしてあらゆることが無駄だろう。そしてここで、[サヴォナローラは]私が繰り返すことも、憶えておくこともできないようなとてもすばらしいことを言った。²⁹

ここでは、無名俗人の筆録者が、サヴォナローラが説教の中で言ったことを「とてもすばらしいこと」と表現していることから、サヴォナローラの説教内容に感銘を受けたことが明らかにされている。また、無名俗人の筆録者が、とりわけ善行と救済の關係に強い関心を抱いていたことはすでに述べたが、「信仰」と「善行」と「救済」について簡潔にまとめた、一段目の筆録内容からもそのような彼の関心の強さを推測できる。

続いて二段目について、『無名俗人の筆録』には以下のように記されている。そして、その文面と『国定版全集』との間にはいくつかの興味深い相違が認められる。

二段目の踏み段は、矛盾と真の不和と言った。すなわち、精神は肉体に矛盾し、肉体は精神に相反する。すなわち「心は熱しているが、体は弱い」³⁰。そして、この楽園の階段を通過して上に行きたいならば、この世では争ったり戦ったりする必要がある。すなわち肉体と、世の中とそして悪魔と。そしてここでも、イエスもまたこの世においてこのような全てのことと十字架で死ぬまで戦っていたというような、とてもすばらしいことを言った。³¹

『無名俗人の筆録』では、二段目の意味は「矛盾と真の不和 *dischordanza e chontradizione*」と書かれている。しかし、『国定版全集』では「必要性 *necessitas*」であり、それについて「これはこの世においてはあらゆる方法で苦しむ必要があるという意味である」³²という解釈が付け加えられてい

る。この両者の相違は、『国定版全集』の説教において、苦しむ必要性の理由について「なぜなら我々の中には多くの対立があるからだ」⁽³³⁾と述べた上で、さらにその対立の種類について、人間には様々な本質的な対立があり、「基本要素の質の対立、肉体の精神に対する対立、知性における対立した理性と似たような他の対立、そしてこれらの対立の中でも肉体と精神の対立がある」⁽³⁴⁾と展開して説明していることから生じたのではないだろうか。すなわち、無名俗人の筆録者には、二段目の意味を示す「必要性」という言葉よりもそれを説明した「対立」という言葉の方が印象に残ったのではないだろうか。そして、その結果として、この筆録者は、二段目の解釈としてサヴォナローラの意図した「苦しむ」必要性ではなく、「戦う」必要性を筆録したのであろう。

次の三段目の記録においては、『国定版全集』に記されたラテン語と『無名俗人の筆録』に記述されたイタリア語の間に相違がある。

天に行くための[三段目の]踏み段を確認と言った。すなわち、今この世に多くの幸運がなく、死ななければならず、自分や息子たちや父や母が死ぬことやもしくは領地や財産を失うことや、もっと多くの他の不運に見舞われることを考えなくてはならないとしても、神の意思と順応し、言う。「わが主よ。私は、あなたが私になさり、これからなさろうとしている全てのことにとも満足している。したがって、あなたは私たちの善のためにそして私たちの救済のためになさります。」⁽³⁵⁾

三段目の踏み段の解釈は、『無名俗人の筆録』では、上記のように「確認 *confermatione*」であるが、『国定版全集』では「合致 *conformitas*」⁽³⁶⁾である。先に述べたように、筆録者が7つの踏み段の解釈をまとめて書いている箇所でも「確認 *confermatione*」⁽³⁷⁾と記していることから、彼が確信をもってこの語を記したことは明らかであろう。では、この二つの単語の違いは、なぜ生じたのだろうか。

『国定版全集』のサヴォナローラの説教では、各踏み段の説明において、各段の意味を示す単語だけがラテン語で記されている。例えば、三段目では、「合致と呼ばれている三段目に上がりましょう。sagliamo al terzo grado che si chiama *conformitas*」と書かれていて、その後に「それは、おまえの意志と神のそれとを合致させるということである。」⁽³⁸⁾とその単語 (*conformitas*) の意味を具体的に表している。もし、サヴォナローラが実際に行った説教でも『国定版全集』と同様に、「合致 *conformitas*」だけをラテン語で表したのであれば、ラテン語とイタリア語という異なる言語間の聞き書きから起こりうる「聴き間違い」または「書き間違い」の可能性が考えられる。また、この俗人の筆録者にはラテン語の知識があったことが指摘されていることから、筆録者が説教全体を聴きながら（あるいは聴いた後で）、説教において実際に使われたラテン語を理解し、自分なりにイタリア語に翻訳した結果、「確認 *confermatione*」と記したのかもしれない。さらには、サヴォナローラは実際に行った説教では「確認 *confermatione*」と言ったが、ヴィオリが速記し、サヴォナローラが校閲して、説教が活字

化される間に「合致 *conformitas*」という語に置き換えられたという可能性も考えられるだろう。

『無名俗人の筆録』の四段目は、以下のように非常に短く、簡潔にまとめられている。

[四段目の]踏み段を機敏さと呼んだ。すなわち、善い行いすることと、あらゆる善い意思とともにそして真実においてその神の意思に確信を持つために準備し、早くすること。時間を無駄にしてはいけない。すなわち「明日やろう、そしてあさって言おう」ではなく、すぐに、機敏に、すすんでやること。そして、言う。「私は今日始めよう、なぜなら明日は私ができるかどうかわからないから。」³⁹

『国定版全集』では、四段目の解釈は5ページなので、他の踏み段についての解釈と比較しても短いことはない。したがって、四段目については、『国定版全集』に書かれている内容はほとんど筆録されていない。サヴォナローラは『国定版全集』の四段目の解釈において、「試練 *tribulatione*」を多用し、これから来るであろう「試練への準備」を繰り返し唱えている⁴⁰。このことから、次章でも述べるように、筆録した俗人は、サヴォナローラの預言的なメッセージに関心を示していないことが窺えるだろう。

また、『無名俗人の筆録』の三段目と四段目の解釈の中には、コーテーションマーク（「」、上記の引用文中では「」）で囲まれた部分⁴¹、いわゆるセリフがある。しかし、『国定版全集』の三段目と四段目の解釈においては、同じような趣旨のセリフもセリフ以外の記述も何ら見られない。したがって、これらは筆録者によって付け加えられた、彼の神への意思、または説教を聴いた後の彼の決意と思われる。

続く五段目の解釈では、三段目についての記述と同様の、『国定版全集』のラテン語と『無名俗人の筆録』のイタリア語との間に相違がある。

[五段目は]謙虚な結びつき。すなわち、謙虚さと質素で神と結合すること。心と知性の中に常に彼をおき、彼の意思を行うことを望み、彼のなさることが善い行いであると思えること。使徒聖ペテロが行ったようなことはしてはいけない、なぜなら軽率だし、慎ましさが無い。こう言ったのだ。「私たちも行って、必要ならばわたしはあなたと一緒に死にましよう⁴²」と。彼はこの言葉を慎ましさから言ったのではなかった。しかし、イエス・キリストは彼に言った。「ペテロ、ペテロ、鶏が2度鳴く前に、おまえは3度私のことを知らないと言うだろう⁴³」、そして、そのようにした。⁴⁴

五段目の踏み段を表す語として、『無名俗人の筆録』では、上記のように「謙虚な結びつき *humile chongiunzione*」が記されているが、『国定版全集』では、ラテン語で「謙虚な自信 *humilis*

confidentia」⁴⁵⁾と記述されている。先述したように、このような単語の違いが生じた理由としては、筆録者の書き間違え、意図した書き換え（翻訳）、またはサヴォナローラの校閲による置き換えなどが考えられる。

六段目と七段目についての記述では、五段目と同様に聖書の引用が記されている。

[六段目の]踏み段を謙虚さと従順さと呼んだ。すなわち、あらゆることを謙虚に行うことが必要である。「自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう。」⁴⁶⁾ イエス・キリストがしたように。彼は謙虚さと忍耐がなければ楽園には入れないという例を私たちに示すために、死ぬまで謙虚だった。そしてここで、彼は市民たちにこう言った。野心的にならないように、社会的地位を求めないように、お互いに許しあうように、善いことを行うように、そうすれば私たちは約束された恩恵を受けられるだろう、そしてそのことによって善意のままでいられるだろうと。

[七段目の]踏み段を固執と呼んだ。なぜなら、善いことを始めたとしても、持続しなければ、何もならず、価値は無い。なぜなら、聖書にこう書いているからだ。「最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」⁴⁷⁾ ⁴⁸⁾

しかし、上記の六段目と七段目のラテン語で記された聖書からの引用は、『国定版全集』には見当たらない。筆録者が、これらを自らの聖書の知識から付け加えたのではないかと思われる。

また、六段目の記述の後半部分は、この『無名俗人の筆録』において唯一、私たちがサヴォナローラの説教に期待する「預言的」なメッセージが書かれている箇所である。無名俗人の筆録者は、それを控えめに表現している。しかし、『国定版全集』の六段目の解釈では、イエス・キリストがこの世で受けた5つの侮辱に耐えた例を挙げ、従順さとは怒りの反対であり、試練においては怒りや情念を捨てて従順であることを説いていて⁴⁹⁾、『無名俗人の筆録』のような未来に関する「預言的」な記述は見られない。一方、次の七段目の「忍耐」の解釈では、以下のように、それに似た内容を述べている。

私があなた方に言ったことを行いなさい。すなわち、神に頼り、慈愛に生き、憎しみを取り去りなさい。私の息子たちよ、精神的な善を愛し、都市の公共善を愛しなさい。なぜなら、あなた方に約束されたすべてのことがなんとでも得られるだろうから。疑ってはいけない。なぜなら神は途中で止めるために始めたのではない。終えるために[始めたのだから]。このように、あらゆることを得られるように、あなた方は善く生きることに固執しなさい、疑うのではなく。固執、私は言う、[それが]あなた方に必要だ。⁵⁰⁾

このことから、『無名俗人の筆録』の六段目についての記述には、七段目の解釈の一部が付け加え

られたと考えられる。無名俗人の筆録者が記憶やメモを基に筆録する際、内容が混乱したのかもしれない。

『無名俗人の筆録』では、以上で、天国に達する階段の7つの踏み段についての記述は終わり、続いて、イエス・キリストの受難に対する聖母マリアの悲しみと苦しみについて記されている。

そして、私たちの聖母が、泣きもせず、他の女たちがするような多くのことをしなかったと[サヴォナローラは]言った。また、彼女[聖母]は慰められなかったが、他のマリアたちや聖ヨハネを慰めた。彼女[聖母]は、彼女の息子イエス・キリストの傍にいた時、彼が自分の死について明白なあらゆることを語った内容を信じ、すべてのことを理解し、自分だけで受け止めた。そして、[自分の]外に苦悩や苦痛を表すことをせず、悲しみすぎず、すなわち憂鬱にならず、そして喜びもせずに謙虚に過ごしたと[サヴォナローラは]言った。謙虚に、落ち着いているように、彼女[聖母]は知ったことを理解した上で、自分の息子の死を望み、死なないことを望まなかった。至聖の三位一体、すなわち神が、贖罪と世界の救済のために、望んだことと理解して。⁵¹⁾

これは、『国定版全集』では、三段目の「確認」（『国定版全集』では「合致」）の踏み段の解釈の中で長く語られた部分であるが、無名俗人の筆録者は踏み段についての記述からは切り離し、その後にもまとめている。『国定版全集』では、「神の意志に合致した行動をとることを学びなさい。」⁵²⁾と述べた後に、その一例として、悲しい息子の死を神の意志として受け入れた聖母マリアについて語っている。しかし、『無名俗人の筆録』では、筆録者がこの記述を踏み段の解釈から独立させたことによって、サヴォナローラが意図した、三段目の解釈である「合致」と聖母マリアとの関係の意味は失われ、単に聖母マリアを称賛する記述になっている。

そして、『無名俗人の筆録』は、最後に以下のように書いて、筆録を終えている。

これが人々や聴衆を大いに泣かせたことで、彼はこれら全ての七段の階段[に上ること]を命じ、他の人たちが走ったり、いわゆるイエス・キリストの受難を非難したりする間に、7つの神秘について言った。⁵³⁾

最後に、当時の説教現場の様子について述べておきたい。『無名俗人の筆録』の中に、「ジローラモ修道士は、この説教を、最近多くの説教師が行っているように、涙を流させたり、泣かせたりするためにしたくはないと言った。」という記述がある⁵⁴⁾。サヴォナローラの支持者たちが、彼の説教を聴いて感動から多に泣き、「泣嘆派」と呼ばれていたことは知られているが、この筆録に従うならば、少なくともサヴォナローラ自身には、聴衆を感動させ、涙を流させる意図はなかったことになる。しかし、聴衆は大いに泣いたのであろう。そして、当時の他の説教師たちは、そのようなサヴォナロー

ラの説教の様子を横目で見ながら、聴衆が大げさな感情表現を示すことを求めているのではないだろうか。

これまで、サヴォナローラの説教について、『国定版全集』と比較しながら、『無名俗人の筆録』の内容を検証してきた。この筆録は、この説教の主要なテーマである天国への階段の7つの踏み段についての解釈にのみ集中しているが、これは先に述べたように、筆録者の信仰心、とりわけ善行と救済の関係への強い関心を示しているといえよう。また、記されている解釈の要点は非常に簡潔にまとめられ、説教内容の骨子を十分に捉えていて、理解しやすい。このことは、説教が行われた1496年は、この俗人によって最初の筆録が記されてから29年後のことであり、筆録者の積み重ねられた経験に裏づけされていることかもしれない。しかしながら、二段目の「必要性」や聖母マリアについての記述など、彼の理解は、サヴォナローラの意図とは異なる場合も少なくない。

4. 筆録されなかった説教内容

本章では、『国定版全集』のサヴォナローラの活字化された説教には書かれているが、『無名俗人の筆録』には欠けている部分、すなわち説教全体の中でおそらく筆録者が関心を示さず、筆録されなかった部分についてまとめたい。

サヴォナローラの説教が、『無名俗人の筆録』にある筆録者が作成した「目次」の中では、「キリストの肉体について」の項目に入れていることはすでに述べた。しかし、前章で検証したように、筆録内容には「キリストの肉体」に関する記述は見当たらない。では、なぜ筆録者はこの説教を「キリストの肉体について」の項目に入れたのだろうか。

『国定版全集』は、以下のように始まっている。

神によって遠ざけられたアダムとイブの罪のために人となったイエス・キリストに愛情深くて、理性的な創造物に対する全能の神の愛は大きかった。そして神は、[人は]まだその結果を知らなかったが、この罪に対して償いをするために、一人息子を人の肉体を得て、十字架の上で苦しむために遣わした。この受肉と受難によってこの世には人の言葉では語れないほどの意義と恩恵が得られた。[・・・] 神は人間の本質が神と一体化することを望んだ、そして神性と人間性のこの一体化は神の本質への人の知性の一体化よりもかなり重要である。[・・・] 受肉と死によってもたらされたその他の特別な意義は限りないので、それらを語ることは出来ない。だが、今日の神秘によってもたらされた多くの他の意義は知られている。そして、しかし、木の十字架の上で我々の最愛の主が今日言い叫ぶ。「苦勞する者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。あなた方を休ませてあげよう」と。今朝はこの言葉についてあなた方の気持ちを慰めま

しょう。⁶⁵

このように、冒頭からイエスの「受肉」と「受難」という言葉が繰り返されている。回心と節制を通して復活祭の準備をする四旬節の説教の一部であるということからも、この説教のキーワードはこの二つの言葉だといえるだろう。また、上記の引用の直ぐ後に、前章で紹介した、創世記28章のヤコブの天国に達する階段が登場するので、これら二つの記述—受肉いわゆる神性と人間性の一体化と地から天に達する階段—から、この階段が人間性と神性を結ぶ、すなわち神と人間とを結びつける手段として捉えられていることが明らかである。一度は神の子が受肉によって地に降りてきたので、今度は人間が階段を使って天に上がり、神に近づくべきだと。したがって、筆録者は、専ら天国への階段についてしか記録していないが、この筆録を「キリストの肉体について」の項目に入れたことから、サヴォナローラが行った説教のキーワードとサヴォナローラの説教の意図を正確に理解していたと思われる。

次に、サヴォナローラが見た幻想についてだが、『無名俗人の筆録』では、前章でも引用したように「彼[サヴォナローラ]が、あの階段について、心に得た幻想や靈感を語る夜が彼にやって来たと言った。」⁶⁶と書かれているが、幻想や靈感の内容は全く記録されていない。一方、『国定版全集』において、サヴォナローラは、階段の7つの踏み段についての解釈を始める前に、以下のような幻想について語っている。

大いなる厳粛さの尊厳のために、私はこの祭日の間に見たことをあなたに言おう。多くの人々の不信がたくさんの慰めを奪い去るだろう。しかし、このためにそれを言うことに満足している。

私は自分の目を上げて、見た。私は目の前の、世界のあらゆる状態（特に誰と誰ということは言いたくない、なぜならそれはいいことではないからだ）の多くの男性と女性でいっぱいのもとても大きな平野に、静かに静かに、全世界を見た。平野の真ん中には花と百合が一面に咲いている小山があり、その山の頂上にはキリストの十字架像があった。それは、赤い血を流し、丸い丸い全世界のために輝き、光り輝く花火をそこかしこに噴出していた。さらに、地面に十分に[赤い血を]流し、私には、世界を二つに分ける川のように思えた。すると、十字架が叫んでいた。「苦勞する者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。あなた方を休ませてあげよう」と。⁶⁷

サヴォナローラにとって、この幻想はただの抽象的な幻想ではなく、続いてこの幻想の解釈を次のように詳細に述べている。赤い血の川によって分割された世界の左側はキリスト教徒のいるローマであり、右側はムーア人と異教徒のいるエルサレムだった。そして、エルサレムの人々は、十字架から流れ出る血を飲んで酔っ払い、天使のように美しくなって出て行った⁶⁸。このことは、すなわち、異

教徒がキリスト教に改宗したことを現している。他方、川の左のローマ側では、十字架を帽子や手や仮面で覆おうとし、その足元では説教師が「苦勞する者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。あなた方を休ませてあげよう」といつているのが聞こえないのか、と叫んでいるが、誰もそれを聞こうとはせず、十字架から仮面を取ろうともしなかった。すると、空から天使がやって来て、それらを取り上げたのである⁵⁹。この描写は、サヴォナローラがそれまでの説教において何度も繰り返して糾弾している、当時の信仰心が篤いとはいえないローマ、とりわけ教皇庁の状況を示しており、サヴォナローラのキリスト教会全体に向けられた改革のメッセージが込められているといえる。

そして、『国定版全集』によれば、サヴォナローラの幻想は、さらに、フィレンツェの状況に及んでいる。

私は見ている。これは何だろう？ 槍、剣、そして白砲やベストがやって来ている。このような中で彼らに言われた、キリストの十字架像に行きなさいと。しかし、多くの者は行きたがらず、武器や砦の方に走っていった。けれども、正面に十字架を持っていた、[川の]左側の人々のうちの何人かは、その川の方に走って、キリストの十字架像から流れ出る赤い血を飲み、天使のように出て行った。このような人々の多くが、わが街フィレンツェの、フィレンツェ市民であることがわかった。そして、剣がやって来た時、武器や砦に走っていた者たちは、よく理解しておらず、全員死に、その後地獄に落ちた。そして、少しの人々しか残らなかった。私に言わせてください、私の人々にとってキリストの十字架像以外に薬はないのだ、そして「苦勞する者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。あなた方を休ませてあげよう」という人のもとに駆け戻りなさいということ。⁶⁰

この幻想における改心したフィレンツェ市民は、サヴォナローラの説教を聴いて悔い改めた人々であろう。フランス軍のイタリア半島での動きに敏感になっている諸国家との戦争やベストなどの疫病の恐怖に曝されている当時のフィレンツェの状況において、サヴォナローラは神を信じ、信仰に戻ることを説いている。

無名俗人の筆録者が罪と罰、善行と救済の關係に強い関心を抱いていたことはすでに述べたが、上記のような現状の社会的・教会的な危機を表す幻想の解釈を全く記録していないことは、この筆録者の関心がより「個人的」な範囲に限られていることを示唆しているのではないだろうか。

最後に、『国定版全集』と『無名俗人の筆録』の内容を比較して、最も強く感じることは、『国定版全集』の中には全編に「試練 tribulazione」という語が見られたが、『無名俗人の筆録』ではそれが全くなかったということである。信仰があれば人は試練においてさらに強くなり⁶¹、人が苦しむためには多くの試練が必要であり⁶²、神と合わされば試練や誘惑から解放され⁶³、そして試練に対して備えなければならない⁶⁴という、『国定版全集』にあるような「試練」を用いた7つの踏み段の解釈が、

筆録されていなかったことは、筆録者が試練に対してさしたる関心をいだいていなかったことを現しているのではないだろうか。一方で、サヴォナローラは「神は過ちを犯し得ない、もし私にこのような試練を与えたのであれば、私を愛し、私の救済のためにそうしている。神は少なくとも私の精神を愛している、そしてもし私の救済のためでなければ、この試練があるはずがない。」⁶⁹と、当時の自分を取り巻く状況が試練であると認識し、それが神の意志であると理解している。

以上のように、『国定版全集』における『無名俗人の筆録』には記されなかった部分をまとめることにより、『無名俗人の筆録』には、とりわけサヴォナローラの説教の特徴である、幻想や試練といった「預言的」な部分が筆録されていなかったことが確かめられ、この俗人の筆録の「屈折度合い」がより明確になったのではないだろうか。また、『無名俗人の筆録』の内容を読んだだけでは理解不可能な、「目次」の項目と筆録内容の齟齬という問題も、『国定版全集』によって説教全体を検討できたことにより明らかになった。

5. おわりに

説教は、非常に一方的な行為であり、本来、説教師が、自分の言葉が聴衆の心に届いたかどうかを確認する直接的で能動的な術はなかった。彼らにできたのは、説教を聴いた人々が自分の説教に従って懺悔にやって来るのをひたすら教会で待つことであった。しかし、中世末期になって、少数ではあっても、聴衆である俗人が説教内容を筆録するようになると、説教師と聴衆の間には、それ以前よりもういづれから積極的な相互関係が生じたといえるだろう。

今日の私たちは、サヴォナローラの当時の巨大な影響力を考える時、彼自身によって、後日に校閲、そしておそらくは修正の上、編集、印刷された刊行文書史料に基づいて、彼の思想の「預言的」な側面や「社会的」「改革的」な側面を強調する傾向にある。それどころか、サヴォナローラの聴衆たちは、彼の説教の「預言的」「社会的」「改革的」な内容に感動し、それゆえに、彼の熱狂的な支持者となったと考えがちである。

しかし、本稿の検証は、事実はいくらか違っていたことを示唆している。もちろん、説教の受けとめ方の個人差は考慮しなければならないが、サヴォナローラの説教に込められた「預言的」なメッセージは、私たちがこれまでのサヴォナローラ像から期待し得るほどには、この俗人筆録者に届いてなかったのである。しかし、その一方で、「聖職者」として発信された魂の救済についてのメッセージは、十分に理解され書き残されている。

註

- (1) 拙稿、「サヴォナローラの説教におけるフランス王シャルル8世の二つの役割」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』、21、2006、pp.1-14。
- (2) Garfagnini, Gian Carlo, 'Introduzione', in Lorenzo Violi (a cura di G. C. Garfagnini), *Le giornate*, Firenze, 1986, pp.XXVI-XXVII.
- (3) 大黒俊二、「文字のかなたに—15世紀フィレンツェの俗人筆録説教」、前川和也編著『コミュニケーションの社会史』、ミネルヴァ書房、2001、p.139。
- (4) 同書、pp.140-141。
- (5) Savonarola, Girolamo, *Prediche sopra Amos e Zaccaria*, (Edizione nazionale delle opere di Girolamo Savonarola), a cura di P. Ghiglieri, vol. III, Roma, 1972, pp.239-285. (以下、*Amos e Zaccaria* と記す。)
- (6) Biblioteca Riccardiana (Firenze), ms. Riccardiano 1186c.
- (7) Zafarana, Zelina, 'Per la storia religiosa di Firenze nel Quattrocento. Una raccolta privata di prediche', *Studi Medievali*, 3^o ser., vol. IX, pp.1033-1113.
- (8) 拙稿、「サヴォナローラの『天啓大綱』 *Compendio di Rivelazioni* における預言」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』、19、2005、pp.246-231。
- (9) Ridolfi, Roberto, *Vita di Girolamo Savonarola*, (Avvertenza di Eugenio Garin e note aggiunte di Armando F. Verde), Firenze, 1997, pp.118-121.
- (10) *Ibid.*, p.121.
- (11) Lancucci, Luca, *Diario fiorentino dal 1450 al 1516*, prefazione di A. Lanza, Firenze, 1985, p.120. (ランドウッチ、ルカ(中森義宗・安保大有訳)、『ランドウッチの日記』、近藤出版社、1988。)
- (12) Ridolfi, *op. cit.*, pp.123-124.
- (13) 48回の説教のうち、主題が『アモス書』の説教は27回、『ザカリア書』の説教は8回、福音書のエピソードの説教は8回、『詩篇』の説教は3回、『出エジプト記』と『知恵の書』の説教はそれぞれ1回ずつ行われている。*Amos e Zaccaria*, p.415.
- (14) Garfagnini, *op. cit.*, p.XII, p.XXV.
また、ランドウッチはヴィオリについて1497年2月25日の日記に、「サンタ・マリア・デル・フィオーレ教会でジローラモ修道士が説教した。[...] その説教はロレンツォ・ヴィオリという名前の若い公証人によって書き記され、公表されたということだ。この修道士がこれまで説教壇で言ったこと、そして書簡や何年もの間に言ったことを書き記したことは、もし言えるならば、超人的だった。」と記している。Landucci, *op. cit.*, p.162.
- (15) Garfagnini, *op. cit.*, pp.XIII-XVI.
- (16) *Amos e Zaccaria*, pp.422-426.
- (17) 拙稿、「サヴォナローラの説教におけるフランス王シャルル8世の二つの役割」において考察した『ハガイ書』についての説教』では、各説教は同じ『国定版全集』でおおよそ20ページだったので、それらと比較すると『アモス書とザカリア書についての説教』の44番目の説教は倍以上に長い。これは、『ハガイ書についての説教』が二人の修道士によって筆録され1541年まで出版されなかったこと、すなわちサヴォナローラの校閲を受けていないことに関係しているのかもしれない。
- (18) 冒頭につけられた目次やページ番号から少なくとも184枚から成り立っていたと考えられるが、86枚しか現存していない。大きさは290mm×215mmである。Zafarana, *op. cit.*, p.1030.
- (19) 大黒俊二、前掲書、pp.154-161。
- (20) Zafarana, *op. cit.*, p.1028.
- (21) 校訂者ザファラーナは、「サヴォナローラのこれ[説教]が、年代的に無名俗人によって筆録された最後の説教である」と述べている。*Ibid.*, p.1030.
- (22) *Ibid.*, p.1028.
- (23) サンタ・レパラータ教会 Chiesa di Santa Reparata。フィレンツェの大聖堂サンタ・マリア・デル・フィオーレ教会のこと。

- 24) Zafarana, op. cit., pp.1058-1059.
- 25) Ibid., p.1059.
- 26) *Amos e Zaccaria*, pp.241-242.
- 27) *Amos e Zaccaria*, p.253.
- 28) Zafarana, op. cit., p.1059.
- 29) Ibid., p.1059.
- 30) マタイによる福音書26章41節を参照。
- 31) Zafarana, op. cit., pp.1059-1060.
- 32) *Amos e Zaccaria*, p.256.
- 33) *Amos e Zaccaria*, p.256.
- 34) *Amos e Zaccaria*, p.257.
- 35) Zafarana, op. cit., p.1060.
- 36) *Amos e Zaccaria*, p.261.
- 37) Zafarana, op. cit., p.1059.
- 38) *Amos e Zaccaria*, p.261.
- 39) Zafarana, op. cit., p.1060.
- 40) *Amos e Zaccaria*, pp.270-274.
- 41) Zafarana, op. cit., p.1060.
- 42) マタイによる福音書26章35節、ヨハネによる福音書11章16節と13章37章を参照。
- 43) マタイによる福音書26章34節、ルカによる福音書22章34節とヨハネによる福音書13章18章を参照。
- 44) Zafarana, op. cit., p.1060.
- 45) *Amos e Zaccaria*, p.274.
- 46) ルカによる福音書14章11節と18章14節を参照。
- 47) マタイによる福音書10章22節と24章13節を参照。
- 48) Zafarana, op. cit., p.1060.
- 49) *Amos e Zaccaria*, pp.277-282.
- 50) *Amos e Zaccaria*, p.283.
- 51) Zafarana, op. cit., p.1061.
- 52) *Amos e Zaccaria*, p.263.
- 53) Zafarana, op. cit., p.1061.
- 54) Ibid., p.1059.

しかし、『国定版全集』の説教の中には、涙に関しては「今朝、私はあなた方から多くの涙を引き出すりつ
もはない。この階段を通して、あなた方をキリストのところまで引き上げたいのだ。」という表現しか見られ
ない。*Amos e Zaccaria*, p.278.
- 55) *Amos e Zaccaria*, pp.239-241.
- 56) Zafarana, op. cit., p.1059.
- 57) *Amos e Zaccaria*, p.249.
- 58) *Amos e Zaccaria*, p.249.
- 59) *Amos e Zaccaria*, p.250.
- 60) *Amos e Zaccaria*, pp.250-251.
- 61) *Amos e Zaccaria*, p.253.
- 62) *Amos e Zaccaria*, p.258.
- 63) *Amos e Zaccaria*, p.263.
- 64) *Amos e Zaccaria*, p.271.
- 65) *Amos e Zaccaria*, p.279.